OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

形式と意味について
——スラブ語の現在・未来時制——

山　田　　勇

I　時制の概念(1)
　　ゲルマン，ロマンス語系言語
II　時制の概念(2)
　　スラブ語系言語
III　ロシア語の時制通史
IV　ロシア語ブルガリア語の現在・未来時制における
　　時制とアスペクト

は　じ　め　に

小論の趣旨はロシア語とブルガリア語の現在時制と未来時制について類型学の立場を加味して比較検討し記述することである。

著者はこれまでにも，ロシア語のアスペクトを中心とする幾つかの範疇について検討を加えたが（[山田 1972]，[山田 1973]，[山田 1974]，[山田 1983]，[山田 1995]）更に最近，スラブ語史やこれまでレニングラードを中心としてロシア・ソヴィエトで積極的に進められてきた『内容的類型学』を瞥見し（[山口 1991]，[山口 1995]），東スラブ語のロシア語と南スラブ語のブルガリア語が異なる環境下で通時的にどの様な変貌を遂げているかを書き留めておく必要性を認めるに至った。

更に最近の研究動向として，動詞をめぐるこの様な広範な範疇を意味論の視点から立論しようとする試みが顕著になってきている。国広［1995］は自ら行ってきた意味論研究を認知科学の側面から，言語事実を出発点に据えて，発展

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

させていくことの重要性に触れている。その際，特に注目すべき意味論の分野として，「語彙」，「表現」，「アスペクト」，「テンスと空間」があげられると述べている。認知科学は心理学や情報科学といった極めて多種類の科学を学の分野として学際的な研究が進められている。言語の「時制理論」の構築も，自らの範疇からだけの接近では，自ずから限界があるものと思われる。

「時制理論」を論述する場合，小論の主題の脇役であるかの様に見えるアスペクトの観点，「時制理論」から見た語彙論，形態論と，そのシンタクシス（構文論）の範疇をも加味して，考察し，時制における「アスペクト的認知」とは何かを，より包括的に論述することを行論の目的とする。

この様な視点から，小論ではロシア語とブルガリア語における時制のメカニズムを現在時制と未来時制を中心に考察する。

I

本章では，時制理論がヨーロッパの言語でどの様な捉え方をしているかについて，概括する。そのことが，本稿のテーマであるロシア語とブルガリア語の時制研究に殊の外，深く関わっているからに他ならない。蓋し，スラブ諸語は，固より印欧諸語の一員であり，通時論的立場を共にしている部分が多々あると思量せられるのである。

ドイツ語の現在時称の用法には，以下のものが認められるとされる。[1)]

1．現在進行形

「しつつある，している最中である」ということを表す。

Horch, die Nachtigall *singt*.

ほれ，さよなき鳥が鳴いているよ。

著者によると英語の現在進行形に相当する形式は存在せず，以下のような構文で表現するほか無いという。

Ich lese eben.

Ich bin im Lesen begriffen.

---

1)　橋本文夫［1970］177-184 頁

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

2. 広義の現在

最近もしていたし，今後も少なくとも当分はしているであろうということを表す。

Dieser Mann *arbeitet* in einer Fabrik.

この男は或る工場で働いている。

Mein Vater *steht* früh auf.

私の父は早起きだ。

3. 現在，存在している人や事物の持続的な性質や状態。

Mein Freund *ist* ein ehrlicher Mann.

私の友は正直者だ。

4. いつも変わることのない事実。

Ehrlich *währt* längsten.

正直は一生の得。

5. ある人の言説が今も生きていることを表す。

Goethe *sagt*: „Stirb' und werde!"

ゲーテは『死して生まれよ。』と言っている。

著者は現在時制を用いることで，ゲーテの述べたことが活写されているとしている。

6. 所謂，「歴史的現在」。

しばしば，過去時制から現在時称に急転することで文体論的な効果が顕著になる。

Da griff, als sie den Führer fallen sahn, die Truppen grimmig wütende Verzweiflung. Die eignen Rettung *denkt* jetzt keiner mehr; gleich wilden Tigern *fechten* sie. (*Schiller*)

時しも総帥の倒れるを見るや，全軍，怒り猛るが如く死物狂いとなった。今ははや誰一人，わが身の安きを思わず，猛虎さながらに戦うのである」。

7. 未来時称の代用。

近未来を表す場合が多い。

Warte nur, balde *ruhest* du auch. (*Goethe*)

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

待ってくれ。もうじきにお前も（＝私も）いこうのだぞ。

未来時称には次の様な機能があげられている。

1. 広く一般的な未来。
   Ich bin ehrlich und *werde* es noch sein.
   私は今も正直だが，今後も正直であるだろう。
2. 1.の範疇は現在時称も多用される。
   Wann *sieht* man sich *wieder*?
   こんど，いつ，お会いしましょうか。
3. werden は推量の助動詞として，一見未来時称の如くして実は現在の事を述べている場合がある。
   Er sollte gestorben sein? Das *wird* wohl eine falsche Nachricht *sein*.
   「彼が死んだんだって？ それは何かの誤報でしょう」。
   Es ist noch früh am Morgen. Er *wird* wohl noch zu Hause *sein*.
   「まだ朝早い。彼はまだ在宅しているだろう」。

ドイツ語の場合，現在時制と未来時制は英語と同様に，形態論的な語構成をとるので意味と形式ははっきりとした役割分担が可能であるかに見える。しかし現実には，上掲の例からも看取せられるように，未来時制は現在時制の一部分を形成していることが明白である。ヘルマン・パウルも『言語史原理』の中で次の様に時制を論じている[2)]

『インド・ゲルマン語の時称を，論理的な一組織に入れようと，種々試みられたが，それには，独断的な態度と，細かい小理屈が，必ずこれに伴ったのである。この場合にも，論理的な規定を試みるに際して，現存の文法的関係を基とし，またこの文法的関係を批判するに当たって，純論理的な区別に依属しないように，警戒することが必要である。論理的範疇と文法

2) ヘルマン・パウル［1970］258頁

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

的範疇とは，完全に一致することはない。更にその上，インド・ゲルマン語の時称には，時間的段階とは直接に何らの関係もない，幾多の要素が表現されていて，これには，最近「動作の様式（体または相）」(Aktionsart) という術語がよく用いられることになっている。』

この指摘には，時制はそれ自身では単独に存在し得ず，たえずこれを構成する背景という文脈，換言すれば，状況を構成している意味の場との有機的関係の解明を必要とするという見解が含まれているように思われるのである。後者を彼は「動作の様式」と考えており，そうした必要性を幾つかの言語，例えばアラビア語，ハンガリー語に認めつつ，これらの言語で「動作の様式」にあたる機能が果たしている役割が，各々の言語の性質を規定してしまうくらい重要であると指摘している。

次にフランス語の現在時称の用法に移ろう。この言語では現在時制には，以下の機能が認められるとされている。[3)]

1. 現在の時

(1) 現在の動作・状態を瞬間的或は継続的なものとして表す。

Il écrit ce mot.

彼はこの言葉を書きつける（瞬間的現在）

Il écrit(lit).

彼は今書いて(本を読んで)いる（継続的現在）

Il écrit depuis deux jours.

二日前から書いている（過去より現在に至る継続）

(2) 現在する習慣的行為 (présent d'habitude)

Chaque matin *je me lève* à sept heures.

毎朝私は7時に起きる

---

3) 朝倉季雄［1970］164，290頁

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

2. 現在・過去・未来を包括する「時」，或はむしろ時の関係を超越した普遍的事実を表す（présent absolu 或は atemporel［超時的現在］）。

(1) 真理の表現・法文・格言

L'eau *bout* à cent degrés.

水は百度で沸騰する

(2) 時に命令の意を帯びる

Cela *se fait* (*ne se fait* pas) (RAD, 194) (= Cela doit (ne doit pas) se faire).

そうするものだ（そんなことをするものじゃない）。

3. 過去

(1) 過去の出来事を目前で行われているように描いて，物語に生彩を添える（présent historique（歴史的現在），或は présent narratif「説話的現在」）

Le Tatasconnais *entend* tout à coup un bruit de pas, des cailloux qui *roulent*. Cette fois la terreur l'*enlève* de terre. Il *tire* ses deux coups au hasard dans la nuit, et *se replie* à toutes jambes... (DAUDET, *Tart. de Tar.*, 251-2)

突然タラスコン人の耳に人の足音が，小石のきしむ音が聞こえる。今度は怖しさのあまり足も地につかぬ。彼は闇の中に盲滅法に二発ぶっ放して一目散に退却する」。

著者はこの用法について，作品の梗概を述べる時にも，多くこの種の現在時制が用いられると説明している。

(2) 近過去

Il *sort* à l'instant.

彼はたった今でかけたところです。

Partir ! Y pensez-vous, Renée ? Vous *arrivez* seulement (*ARLAND, Ordre,* 183).

帰るんですって！それ，本気なの，ルネ？　たった今来たばかりなのに。

4. 未来

(1) 未来の事実を確定的なものとして描き，近き未来，或は計画・意図（こ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

の場合は遠い未来のこともある）を表す。

Je *suis* de retour dans un moment.

すぐ帰ってきます。

Je *vais* ce soir au théâtre.

今夜は芝居に行きます。

5. 受動態の現在時制が現在の状態（完了した行為の結果）を表す場合。

更に未来時制についてその機能をあげると以下の如くである。

1. 未来に行われる瞬間的・継続的行為で可能性・意図を表す。

J'*irai* le voir.

彼に逢いにいこう。

Quand l'ennemi *saura* notre nombre, il *s'enfuira*

敵がわれわれの数を知ったら，逃げだすだろう。

Dès qu'il *cessera* de parler, nous *partirons*.

彼が話をやめたら，出掛けよう。

著者によれば，最後の二例では，行為の完了を表す意図がなければ前未来を用いず，先行する動作・状態が後続する動作の行われる時まで継続する時，未来形となるという。

2. 過去における未来は一般に futur dans le passe で表されるが，過去の叙述で筆者が観点を過去に置き，過去における未来の出来事を単純未来で表す場合。

A l'aube du siècle, Chateaubriand *viendra* 《ressusciter l'âme》...

世紀の黎明に Ch. が現れて「魂をよみがえらせる」であろう。

（歴史的現在）

3. 一般的真理

Les faibles *seront* toujours. (Gr. Lar., 330)

弱者は常に犠牲にされるだろう。

4. 命令

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

(1) 要求，勧告，方法の教示などで命令の語気を緩和する。
Si on te paie tout de suite, tu *diminueras* six francs.
すぐ払ったら，6フラン負けておやり。
Vous *prendrez* le premier chemin à droite.
最初の道を右にお曲がりなさい。

(2) 絶対的命令
Tu ne *tueras* point (*Décaloque*).
汝殺すなかれ。

5. 直説法現在に代わり断定的語調の緩和 (futur de politesse)。
Je vous *demanderai* la permission de partir.
出発のお許しを願いたいのですが。

6. 感嘆文で，現実の事実を未来まで継続するものと見なして憤慨を表す。
Quoi ! Ces gens *se moqueront* de moi ! (La F., Fab, 18)
何! 奴らが私を馬鹿にするなんてことがあってたまるか!

7. 予想，推測 (avoir, être の単純未来)。
Il *sera* à Paris à l'heure qu'il est.
彼は今頃はパリにいることだろう。

8. 条件・譲歩の意を帯びる。

(1) 条件
Tumarche et moi, on *sera* dans la terre, qu'on n'aura plus besoin de toi (中平『フ研』1).
Tとあたしがあの世へ行けば，あなたのことなんかかまう人はいなくなることよ。

(2) 譲歩
Vous y *mettrez* tout votre argent, vous ne sauverez pas cette maison de la faillite (B, 870).
あなたが有を全部をつぎこんだとしても，あの家を破産から救うことはできまい。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

フランス語の場合も，ドイツ語，英語と同様，時制を形態の上から細かく区分することで言語表現と，その実体である状況の表現にそれほどの乖離を認めないかに見えるが，現在時制で「歴史的現在」，或は「説話的現在」といった過去時制の範疇が表現されたり，近未来に関わる事実を記述でき，一方未来時制でも，過去における未来や，これは法との関わりが問題となるのだが，未来の概念が「命令」や「仮定」を意味する局面で援用されるという現象が認められる。このことは，ドイツ語にも当て填められよう。[4]

この理由の淵源を求めるためには，一つの仮説が必要であり，その理念によって，殆ど同じ考え方，つまり機能がこれらの言語の深層で働いていると考えざるを得ないのである。もしそのメカニズムが解明されれば，例えば，フランス語に見られる「受動態の単純未来は完了した行為の結果である状態を表し得る」という現象もそう無理なく説明されるのではないかと考えられる。このことに関連して，パウルは次の様に説明する。『文法的時称の意義について，なおこのほかに，第二義的な性質の幾多の要素を考慮に入れることができる。たとえば，ある事態が発生すると，常に何かの結果を残すものであるから，ある事態が発生したと述べる際には，あとに残った結果もともに理解されるのであって，しかもこのように，意義では本来，単に偶然的なものが主要な事柄になることもある。しかし，この結果が本義とみられると同時に，完了の意義は，必然的に現在のものとなって現れるのである。これがインド・ゲルマン語完了形の本来の機能であったので，したがって，発達は逆の経過をとったという見解も支持されたのである。この推定は，ほとんど正確とはいえないもので，いずれにしても，証明することができないのである。しかし，他の表現で言いかえられるドイツ語の完了形をみれば，この逆の経過は確実である。』[5]

次にドイツ語と同じ係累関係にある英語の時制について考えてみよう。細江

4) パウルは現在時制が未来時制の代わりに代用せられることは世界の言語にしばしば見られるが，ドイツ語では，過去時制に代わり現在時制が用いられることは「歴史的現在」を除けば，希な現象であるとも述べている。ヘルマン・パウル［1970］260頁

5) ヘルマン・パウル［1970］261-262頁

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

逸記は『動詞時制の研究』で次の様に現在時制について次の6種類の文例をあげて，説明している[6]。

(a) True Present
Mother, the kettle *boils*.
お母さん，湯沸かしが沸いてますよ。

(b) "Everlasting Present"
All man *die*.
人は皆死ぬ。

(c) Habitual Action or Repeated Event
How can you say such a thing? Why, he *rides* in the Row at ten o'clock in the morning, *goes* to the Opera three times a week, *changes* his clothes at least five times a day, and *dines* out every night of the season. ——Wilde, *An Ideal Husband*, I.
どうしてあなたはそんな事が言えます。何しろ，彼は毎朝十時にはロウに馬を駆り，週に三回はオペラに行き，一日少なくとも五回は着物を更えるし，社交季節になれば，毎晩外で食事をする有様ですよ。

(d) Future Event
"Oh sir," cried I, "when *do* we *sail*?" "Sail!" says he. "We *sail* tomorrow!" ——Stevenson, *Treasure Island*. VII.
「おじさん，いつ出帆するのですか。」と私が叫ぶと，彼は，「出帆！　明日出帆だよ」と答えた。

(e) = "Present Perfect"
I've been making inquiry about the artichokes, and I'*m told* they are not ready to eat till the autumn. ——Gissing, *The House of Cobwebs*.
菊芋のことをいろいろ尋ねてみましたが，どうも秋までは食べられるようにはならないと聞きました。

---

6) 細江逸記［1995］16-49頁

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

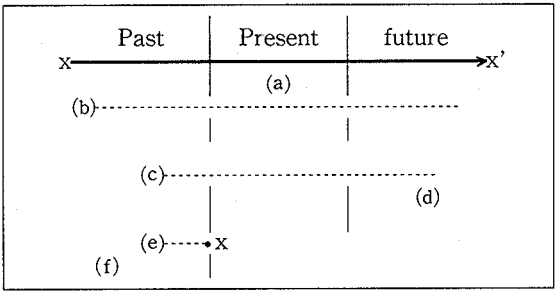
(f) Past Event

His mind has got unhinged, I fear. Only yesterday he *meets* me in the street, *asks* me my name and without waiting for reply *walks* off.

彼はどうやら気が変になったようだ。昨日も昨日で町で彼に会うと私の名前を聞いておきながら，返答も待たずにスーッと行ってしまった。

彼によると，(a)，(b)，(c)については説明可能であるが，(d)から(f)については十分な説明を加えることは困難であるとしつつ，ホィトニーの『言語と言語研究』やポールの『言語史原理』，或は，ヴァンドゥリィエスの『言語』等の著作を引いて，元来，印欧諸語で時制が諸言語に整備されるようになったのは，比較的新しいことであり，時制形成以前の状態にあって，この範疇の役割をしていた語彙の形態上の古形や，それぞれの言語に見られた時制を表す意味論的手段を詳かにしなければならないと述べている。その上で，彼はこの範疇を暫定的にこの語形を『直感直叙の語形』と名付けているのである。

そしてこれらの用法を以下の様に纏めている。



筆者は未来時制に属するタイプを次の4種類に分類する。[7]

(1) He *will come* tomorrow. I *shall see* him tomorrow.

7) 細江逸記［1955］147-192頁

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

(2) That *will be* the postman ringing.
(3) He *will* often *drop* in on a Sunday afternoon for a chat.
(4) The people were oppressed by tyrants, but soon the standard of revolt *will be raised*.

筆者によると(3)は習慣を意味するものの，意志の助動詞と結びつき，習性を表現しているので(1)に含まれる。(4)は所謂「歴史的現在」であるから，これも事実上(1)に属する。(1)は単純未来で，(2)は「想像」を表しているが，単純未来も現在から見た「想像」であるから，未来時制の固有な機能は概ね『想像（推測）叙述』あると規定する。

彼はまた，『万葉集』にみられる「む」，「べし」等の助動詞が未来の助動詞となる過程をひいて，彼の自説の傍証とした。

英語は現代では，アスペクトの機能を幾重もの時制システムに統合することで，形態論的に表現している。しかし，英語の時制機能からも，我々はこの範疇が言語表現形式と表現対象の持つ状況の意味が，一見すれば，整合性を欠いているかに見えながら，少し整理することで，この言語に働いている両者の役割の分担を看取することが出来よう。この場合にも状況の解釈を容易にするのは，「動作の様式」を基準とした時制の考察である。

II

次に，ロシア語とブルガリア語について考察を加える。ロシア語を始めとするスラブ語ではアスペクトは独立した範疇として形態論的に示差的弁別を可能とする状態で存在し，この範疇と時制がマトリックスの状態を堅持しつつ，言語表現の中で，表現対象と対峙している。例えば，一つの表現対象である「読む」という行為は，二つの形態論的形式として存在し，各々 читать と прочитать という形で種々の，「読む」という行為を表現する。アスペクトは前者は不完了体，後者は完了体である。このアスペクトに時制の過去，現在，未来の各時称とが組み合わされて一つの「意味の場」が表現される。

(1) Он не *читает* по-испански,

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

彼はスペイン語が読めない。(不完了体現在)

(2) Глаза его *читал,* но мысли *были* далеко.

彼の目は読んでいたが，思いは遠い彼方にあった。(不完了体過去)

(3) За обедом он не *будет* читать.

食事の時には彼はものを読まないでしょう。(不完了体未来)

(4) Он *прочтет* в газете об этом.

そのことを彼は新聞で読む（でしょう)。(完了体現在)

(5) Он *прочитал* письмо три раза подряд.

彼は手紙をその場で三回読み直した。(完了体過去)

用例(4)の例では，現在時制であるにも拘わらず，時制としては「未来」として認識されている。これは，ロシア語の完了体現在では，「読む」という動作自体が，その発話後に実現される行為となることから，発話時点での意味としては未来となることによる。日本語の「これからよみます。」にあたる表現である。しかし，日本語と異なる点は，この語形が「完了」というアスペクトをとることが文法的に弁別できることにある。

次に，ロシア語の現在時制の用法についてアカデミー版『80年文法』では次の様に定義されている。[8)]

1. 実在の現在　настоящее актуальное

Вон каменщики *мостят* улицу.

ほら，レンガ職人たちが街路を舗装していますよね。

(ア．エヌ．タルストーイ)

2. 恒常的現在　настоящее постоянное

Могучие полноводные реки из край *перепоясывают* северную темную тайгу.

壮大でなみなみと水をたたえた河が北国の暗いタイガをくまなく帯状に流れている。(イ．サカローフ－ミキトーフ)

3. 抽象的現在　настоящее абстрактное

---

8) АН СССР Русская грамматика [1980] 630-636頁

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

繰り返される具体的行為を抽象化し，典型として示す用法である。

Девушки часто *плачут* беспричинно.

年頃の娘たちは屢々，訳もなく涙するのである。(ゴーリキー)

4. 描写の現在　настоящее изобразительное

発話時との結び付きはない用法で，主に文語に現れ，文芸作品で（特に詩で）多用される。

Стою на царственном пути. Глухая ночь, кругом огни, — Неясно *теплятся* они, А к утру надо все найти.

王道に立っている。深夜である。あたりに明かりが見える。それらは微かに光を放っている。でも朝までには総てを探し出さねばならない。

（ブローク）

5. 注釈の現在　настоящее комментирющее

Жан на террасе с букетом цветов. Увидев Нину, *прячет* букет за спиной, *исчезает* и *входит* уже без букета.

ジャンは花束を持ってテラスにいる。ニーナに気付くと花束を背中に隠して，姿を消し，花束は持たずにまた入ってくる。

（ゴーリキー　戯曲のト書き）

6. 歴史的現在　настоящее историческое

Только, понимаешь, *выхожу* от мирового, глядь — лошадки мои *стоят* смирнехонько около Ивана Михайлова.

私が調停判事のところから出てきて，見ると，私の馬が，イワーン・ミハーイロフのそばでおとなしくしているんです。

（ブーニン）

7. 予定の行為を表す現在　настоящее намеченного действия

Я будущей зимой *уезжаю* за границу.

私はこの冬，外国に旅立つ。

（ツルゲーネフ）

想像的行為の現在　настоящее воображаемого действий

Вообразите же, что вы *встречаетесь* с ней потом, через несколко

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

времени, в высшем обществе ; *встречаетесь* где-нибудь на бале . . .
Она *танцует*. Около вас *льются* упоительные звуки Штрауса, *сыплется* остроумие высшего общества.

あなたが暫くして，彼女と上流社会で出会うと想像してください。どこかの大舞踏会で君たちは出会う……彼女は踊っていて，君のまわりでは，すばらしいシュトラウスの音楽が流れ，上流社会の気のきいた会話が交わされる。(ドストエーフスキー)

同『文法』による未来時称の定義は以下の通りである。

1. 個々具体的な情景を表す　конкретное единичное
Сейчас хозяин *придет, Ужинать будем*.
これからご主人が来られるので，食事をご一緒しよう。
(パノーヴァ)

2. 複合未来　будущее сложное
Я, например, в дороге спать не могу, — хоть убейте, а не *засну*
. . . Я одну, другую, третью ночь не *буду спать*, а все-таки не *засну*
例えばね，私って，旅先では寝られないよ。いっそ殺してくれたらとさえ思うの。でもやっぱり寝付けない。初めての日も，次も，その翌日も眠らないことになっちゃって，それでもどうしても寝付けないでしょうよ，きっと。(エル．タルストーイ)

3. 行為に対するそなえから，その確実性が明白であることを表す　уверенность в постоянной готовности
Целый день марабу *будет дежурить* у бойни, чтобы получить кусок мяса. *Поедает* и отбросы у хижин.
一日中肉の塊を貰うために，屠殺場の近くでその鳥を見張るでしょう。百姓小屋の屑をも食べるかもしれない。(ヴェ．ピィエスコーフ)

4. 過去の習慣的行為が未来でも生起しうることを表す　будущее на план прошедшего времени обычного действия.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

Об арифметике и помину не было: вряд ли и считать-то умел, но зато лакомиться, франтить — мастер! Целое утро *будет сидеть* и не *пошевелится*, только завей ему волосы.
算数のことを誰も口にしなかった。恐らく計算そのものは出来たのだろうが，その代わり，美味しいものを食べたり，めかし込んだりすることにかけては巨匠の域である。午前中すわり込み，微動だにせず，髭にカールを付けているに違いない。(ア．ピーセムスキー)

ロシア語の，時制とアスペクトの関係を我々は，時制の区分は人間の実在の各瞬間に対する目覚めとして捕捉されるもので，時の流れを認識主体がどのように非連続な時間に区切るかという命題に関わることと捉え，それはつまるところ，或る時制に対して各「表現対象」での認識主体がとる態度の特徴について解明する事を意味しているとした。

また，アスペクトの選択は，どの様な「表現対象」を言語で表現しようとしているかという問題，つまりアスペクトに意味論的な側面が深く関わってることが認識された。[9] これは「動作の様式」に他ならないであろう。

ブルガリア語の現在時制の検討に移ろう。この言語もロシア語同様時制とアスペクトは有機的な関係として機能し続けている。更にブルガリア語では，イ．ブーニナ［И. К. Бунина 1970］がいみじくも指摘しているように，スラブ語の共通する特徴である名詞格変化を失ったが，それに比べて動詞は大変保守的で，古代においても現代においても同じ9つの時制形の下に活用している。これは，独りこの言語が南スラブの地で営々とスラブ語のメカニズムを維持しながらも，近隣の諸言語，例えば，ギリシャ語，トルコ語，アルバニア語等との交流という環境から受ける影響を受けて，漸次，自らの姿を変化しつつあることを物語っていよう。[10]

---

9)　山田勇［1973］
10)　Б. Байчев［1985］9-91頁

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

(1) Аз *чета* книгата. Аз мога да чета.
私は読書をする。(現在)

(2) Аз *прочетох* книгата.
私は読了した。(完了過去)

(3) Аз *четях* книгата.
(その時) 私は読書をしていた。(インパーフェクト)

(4) Аз *съм чел* книгата.
私は読書をした。(パーフェクト)

(5) Аз *бях чел* книгата.
(ある時までに) 読了していた。(大過去)

(6) Аз *ще чета* книга.
私は読書をするでしょう。(単純未来)

(7) Когато дойдеш, *ще съм прочел* книгата.
(その時までには) 私は読み終えているでしょう。(未来完了)

(8) Ако беше заваляя дъжд, *щях да чета* книга.
もし雨が降ったら，読書したのに。(過去未来)

(9) Вчера следобед щях да *съм прочел* книга, ако не бях отишъл на екскурзия.
昨日午後には読書したでしょう。もし観光に出かけなかったら。
(過去未来完了)

ここでブルガリア語の現在時制の用法について考察しよう。[11)]

(1) この言語では現在時制はある瞬間と同時に生ずる行為を意味する。しばしば，この瞬間は発話の瞬間であるあることが多い。
В момента Мария *пише* писмо, а аз *гладам* телевизия.
その時マリアは手紙を書き，私はテレビを見る。

---

11) Despina Ilieva [1982] 11-107 頁

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

(2)　しかしこの瞬間は過去の瞬間でもありうる。

Преди пет минути *се събуждам* от някакъв шум и *скачам*.

5分前に何かの物音に気づいて起きて，すっくと立ち上がる。

(3)　また未来の瞬間でもありうる。所謂近未来である。

Довечера *отиваме* на гости.

今晩お客に行きます。

(4)　現在時制は断続的に繰り返される行為をも表しうる。

Всяка сутрин *ставам* рано. Вечер често *се храня* в стола.

毎朝早く起きる。夕方しばしば食堂で食事をとる。

次に未来時制の用法について考察しよう。用例については17頁の例文(6)から(9)を参照されたい。

(6)　単純未来　現在や未来の反復行為

(7)　未来完了　未来のある時点より前に起こる行為

(8)　過去未来　過去のある時点の後に行われた行為・過去のある時点の後でおこりそうでおこらなかった行為，条件文で，ある条件が満たされていれば，必ず行われていたはずの行為

(9)　過去未来完了　別の過去の時点以前に実現しただろうと仮定される行為

ブルガリア語はスラブ語の揺籃期から存在する言語であるが，動詞と名詞のパラダイムを見る限りにおいては，ゲルマン系言語に属する英語とよく似た発達の過程を辿っていると言える。他の言語と同様，現在時制に歴史的現在の用法も存在するし，未来時制に，現在や過去の概念が関わっている。これまでの考察で，スラブ系言語の場合は，言語の表現形式と意味領域が，時制とアスペクトの諸形を介して，割合，整然とした体系を保ち，これに対して，ゲルマン系，及びロマンス系言語では，時制の発達が，「動作の様式」の表現を含んでおり，言語表現の背景を構成していることが諒解せられるのである。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

III

前章でブルガリア語の時制の検討の際に，スラブ語の共通する特徴である名詞格変化を失ったが，それに比べて動詞は大変保守的で，古代においても現代においても同じ9つの時制形の下に活用していることを見てきた。これからロシア語では，どの様な過程を経て時制が著しく整理されていったかという経緯について，ブルガリア語動詞の時制と対照する意味で，古ロシア語史の考察をしておく。[12)]

最古の古ロシア語文法はヨアンネス・ダマスケーノスの手になるものの翻訳（15世紀『我々が話し聞く限りの八品詞』）として現れた。この文献では，時制は，ギリシャ文法に倣っている。時制という述語（врѣме）はギリシャ語の χρονος から採っている。現在時制と未来時制はそれぞれ(そこに立つ，そこにある）（来たるべきもの)として説明されるが，時制の種類については詳らかではない。「動作の様式」，つまり，アスペクトはやはりギリシャ語の εἶδος（εἴδω ＜見る＞)から採っている。つまり，表現対象の見方の問題と考えていたことが推量せられる。この範疇は「初原体」と「派生体」，つまり，不完了体と完了体というわけである。当時の水準からすれば，かなり的確な考察といえよう。

1596年にはウクライナ人のラヴレンチー・ジザニーが『八品詞及びその他の必要なことの完全な知識のスラヴ文法』を上梓している。本書で初めて教会スラヴ語と口語の区別がなされた。当時は教会のミサに使われる教会スラヴ語は宗教儀式にのみ使われ，民衆語までは文法書に取り上げられなかったのである。本書によると，時制のうち，直説法は現在，完了，未完了過去，大過去，未来が記述されている。

この範疇のうちアオリストがないのは，山口によると，この時期には既にアオリストと完了とは機能的に混同されていたと考えられ，一つの範疇に落ちつ

12) 山口巌［1991］

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

き始めていたことを予測させるものだという。

1619年にはウクライナのスモトリッキーが『スラブ文法の正しい構成』と題する文法書を出版した。動詞についてみると，「存在動詞」，「呼称動詞」，「一般動詞」に分類している。彼は以下のように他動詞と自動詞の区別を認めている。「他動詞は格を付加することなしには，完全な意味をなさないものである。……自動詞は格を付加することなく，それだけで完全な意味をなすものである」。当時のスラヴ語の現象の法則性をかなり明確に意識したものといってよい。

時制はスモトリッキーによれば次の七つに分かたれる。1）完全動詞現在，2）多回動詞現在，3）過渡，4）過去，5）傍過去，6）アオリスト，7）未来である。始発を意味する動詞や，多回体という概念を導入したことも，従来にない着想である。山口はこれを動詞の造語法を加味した見地から考察し，多回体動詞，単純動詞，前綴動詞として，上述の体系は次のように分解することができるとしている。

	多回体	単純	前綴
現　　在	多回現在	完全現在	未来
アオリスト	過去	過渡	アオリスト
未完了過去	傍過去	—	—

これにより，単純動詞のアオリストが未完了過去の意味をもって用いられるようになっていたことが窺われるが，これもアオリスト・未完了過去形から完了体への通時的移行を示していた当時の傾向を示すものであるといえよう。

1750年にはスウェーデンのグレーニングが『ロシア語初歩』を出版した。1731年のアドドゥーロフの手になる同名の書のスエーデン語訳か否かについては不明である。

グレーニングも「体」の範疇については，まだ明確にはなっていないが，アスペクトの様なものとして，他の動詞がそれから派生する「初原体」と，「派生体」を区別し，派生体はさらに起動体と多回体に分けている。山口は，グレー

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ニングが，単純動詞，多回体動詞，完了体動詞を一つのパラダイムに纏めたことを捉えて，彼が，それらの文法上の関連性，アスペクトの存在の予感を覚えていたと見なしている。

彼によると，時称は現在，未完了過去，完了および未来に分類される。現在は，現在の時を，未完了過去は，完全には過ぎ去っていない何かをあらわす。（ я любливалъ 〈私は愛していた〉， я учивался 〈私は学んでいた〉）。そして副詞 давно 〈ずっと以前に〉をこの文に添加して，過去完了を表すことがあるとしている。また次の「完了」に副詞 недавно 〈最近〉を附加し，未完了過去を表すとし，その完了は完全に過ぎ去った時を示す。（ я любилъ 〈私は愛してしまった〉， я писалъ 〈私は書いてしまった〉， прочолъ 〈私は読み通してしまった〉）。次に，未来は，起こるであろうところの何かを示す。（ прочту 〈私は読み通すつもりである〉あるいは〈読み通すであろう〉， напишу 〈私は書くつもりである〉あるいは〈書くであろう〉， выучу 〈私は教えるつもりである〉あるいは〈教えるであろう〉。）

グレーニングの記述を若干整理すると，この時代になると，未完了過去と完了形を過去時制と考えれば，現在，および未来とで時制の体系が歴史的事実としてもかなり整理されてきたことがわかる。未完了過去と完了形はマトリックスの一つの要素として不明確ではあるが認識されていると言える。

1757年にはロシアのロモノーソフが『ロシア文法』を上梓した。これはロシア人によってロシア語で書かれた最初のロシア文法であり，ロシア民族の誇るべき歴史的な文化遺産である。彼はまた本書の序文で，母語であるロシア語のはかり知れぬ奥行きの深さを認めていることからすれば，彼が如何に科学的に一つの言語を書き留めようとしたかが諒解出来るのである。彼は，当時教会スラブ語がすたれ，民衆語の体系が整備され始めるという時代状況を踏まえ，これらの言語を文体上の観点から捉えて，文語と口語に分け，各々の特徴を記述した。

ロモノーソフも動詞の体については言及していないものの，その時制観からすれば，彼以前の諸家よりも十分体の範疇が意識されていた。彼の時制観を山

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

口は次のように整理した。

I　単純不完了体動詞
　現　　在　　трясу　（現在）
　不定過去　　трясъ　（過去）
　不定未来　　буду трясти　（未来）
　大過去II　　бывало трясь
II　一回体動詞（完了体）
　一回未来　　тряхну　（未来）
　一回過去　　тряхнулъ　（過去）
III　多回体動詞（不完了体）
　大過去 I　　тряхивалъ　（過去）
　大過去III　　бывало тряхивалъ
IV　前綴完了体動詞
　完了未来　　напишу　（未来）
　完了過去　　написалъ　（過去）

この体系は古ロシア語において特に時制の範疇が歴史的に，どの様に変化したか，更にいみじくも，「行為の様態」がどの様に時制と関わっているのかを示すものであるということが出来るであろう。そして彼は，過去と未来時制のある機能を次のように定義しているのである。

過去については，不定過去時称は行為のある継続乃至は反復をそのうちに含み，時には完了したことがら時には不完了の行為，をあらわす。また，一回過去は一度だけ完了した行為をあらわす。次に未来時称については，完了体の現在形が未来の意味を持ち，不定未来は完了したかどうか判らない未来の行為をあらわす。また一回未来は一度だけ完了するであろう行為をあらわす。

東スラブ語であるロシア語の時制に関する歴史的変遷を調べてきたが，得られた幾つかの観点から，この言語における時制の変化の方向性を次のように規

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

定することが可能となろう。

17世紀初頭には，ロシア語の時制は直説法でみると，現在，完了，未完了過去，大過去，未来を数えることが出来たが，この範疇のうち，この時期まで存在していたアオリストが脱落を始めている。そして，アオリストが完了というアスペクトと，動もすれば機能的に混同されるようになってきた。これは時制という範疇が，「行為の様態」を表すアスペクトと同一視され始めた結果とは言えないであろうか。アオリストという時制は，基本的には「現時点以前の決まった過去時点に行われた行為を表す」時制の一種であるが，現代ヨーロッパ諸語の時制にしばしば見られた，現在時制への未来時制の転用や，未来時制と現在時制，或は過去時制との共用的関係などは，その時制の根拠となる，表現のための時間の基本軸を何処に据えるのかという問題と密接に関わっているのである。現実の時間と合わせる場合は，何等問題は生じないが，例えば語る主体が，屢々現実の時間軸ではなくて，表現されるべき「意味合い」を基準として，表現したい内容についてはこうした時間軸から解放されることがある。先に例示した

All man *die*.　　「人は皆死ぬ。」

の様な例がこれに当たろう。時制は確かに，現在ではあるが，茲に述べられた，命題の要旨は，人間誰しもが避けることの出来ない，「死」という一般的真理を述べたものにすぎず，この表現は当に，「普遍的真理」という一般化された意味，つまり時間軸を基準としない発話，即ち「アスペクト」的な内容を表現しているものと思われる。茲に表現形式と意味内容との相克が見られる。

次に同時期に，現在，アオリスト，未完了過去の3時制を区別するとする考えも存在したが，この場合は動詞そのものの語形成をも加味して考察すると，アオリスト形は単綴形，前綴形ともに亘っている。これらの場合は，所謂単純過去を意味するが，多回体から作られるアオリストは，繰り返される現象の記述を意味する場合に用いられた。従って，前者には，完了体的な「様態」が，後者には不完了体的な「様態」が看取せられるのである。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

次に18世紀後半では時制は，未完了過去と完了形を過去時制と考えれば，現在，および未来とで時制の体系がほぼ現代ロシア語の様式に収斂することとなった。そして，ロモノーソフに至って，ほぼ，我々が認識できる時制とアスペクトの様式が以下のように記述できるようになったのである。

体／時制	過　　去	現在	未　　来
完了体	完了過去 написалъ 一回過去 тряхнулъ		一回未来 тряхну 完了未来 напишу
不完了体	不定過去 трясъ 大過去Ⅰ тряхивалъ 大過去Ⅱ бывало трясь 大過去Ⅲ бывало тряхивалъ	трясу	不定未来 буду трясти

これによれば，ロシア語を始めとするスラブ諸語が，他の印欧諸語に比して，アスペクトを発達させてきた主な淵源を，時制の役割・機能を簡素化したかわりに，相対的にアスペクトにその機能を補完させながら，双方の役割分担を確立しようとしている方向性に求めることが可能であると思われる。元来，通時的に考えると，アスペクト的な考え方の方が時制概念より，印欧語の揺籃期には，より発達していたのだが，時代が下るに従って，現代ブルガリア語の如く，時制が細かく弁別されるようになってきたのである。

山口はベレリムーテルの説を引きながら，印欧祖語の動詞は活用でなくある意味のグループとして捉えられていたにすぎなかったのであろうと説明している。そのグループとは 1. 物理的状態を表すもの，*πέπγα*「突き刺されている」2. 恒常的状態を表すもの，*ἔοικα*「似ている」3. 心理状態，思惟の過程，感覚の受容等を表すもの，*τέθηπα*「びっくりしている」4. 音声を表す語，*βέβρυχα*「うめく」等であり，ベレリムーテルはさらに『印欧語の完了形は，本来非行為的な意義をもった述語という，特殊な語彙的，文法的な語のクラスを構成していた……印欧諸語の歴史以前のある時期に，その文法構造において，大きな

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

役割を演じていたのは，行為を示す述語と，状態を示す述語の区別であった』[13]と推論している。

さらに，スラブ語では，アオリストがアスペクト的役割を分担することで，この時制に見られた中心的な「表時」機能ではなく，それとは別の意味的な「剰余」ともいうべき機能を補完する傾向が顕著になってきていると言えよう。

IV

我々は，印欧語の時制とアスペクトの関係を通時的観点から考察し，この二つの範疇が相補いながら，言語表現に関与するメカニズムについて些かながら，知見を得た。本章では，さらに，言語類型論的な側面から，当該概念を分析する。次例を参照されたい。

ニーナ・フョードロヴナは生粋のモスクワっ子だった。[14]

Нина федоровна *была* московская уроженка.

Нина фьодоровна *беше* московчанка по рождение.

この文章は「AはBである」という命題を，連辞動詞 быть の過去時制で表現したものである。ロシア語ではこのタイプの命題は現在時制で表現されるときには連辞動詞は省略されるのが一般的である。(所謂ゼロ連辞文)従って上記文章を現在形で表現すれば，以下のようになる。

Нина федоровна московская уроженка.

これに対して現代ブルガリア語では文法的に連辞を省略することは許されない。以下の如くである。

Нина фьодоровна *е* московчанка по рождение.

「AはBである」という命題はまた，動詞連辞を伴って表現されることがある。次例を参照されたい。

---

13) 山口巌［1995］246頁

14) 例文は原則としてチェーホフの作品「三年」から採った。原文についてはチェーホフ［1988］［А. П. Чехов 1977］［А. П. Чехов 1988］の順に記載する。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

熱烈な恋愛なんぞ精神異常だよ。

страстная любовь *есть* психоз,

страстната любов *е* психоза,

この場合，ロシア語では動詞連辞現在形は三人称単数でしか用いられず，これが表現されるのは文体論的な観点からであるとされる。一般的には学術文書や，公文書などで現れるといわれる。これは現代ヨーロッパ諸語の中でも珍しい現象である。山口はこの現象は動詞連辞の省略されたものとは考えず，寧ろロシア語では主語と述語の関係が時代とともに緊密さを失い，それに引き替えて，述語と目的語（補語）の関係がより強く言語表現の中で位置づけられるようになりつつあることの証左ではないかと推論している。[15)]

『連辞 быть は現在時称では есмь，есь，есть，есмы，есте，суть のように変化していたが，現在では есть だけが現形としてすべての人称に用いられているが，それも特に強調するときか，「存在する」という意味の外はふつう用いられない。述語の主語からの相対的な独立性の獲得の前提として，人称変化の衰退が必要であったためである，と考えなければ，説明はむずかしい』

ロシア語動詞の一部とはいえ，人称形を失っていくことの異質性は，この言語の以下の如きいろいろな統語的特徴にも現れている。

そのための見積書ももうできていると話した。

и что у него даже уже *есть* смета.

и че дори бюджетът *е* вече изготвен.

ロシア語では所有を表すのに，иметь（持つ）という一般動詞を用いずに，前置詞語結合

15)　山口巌［1995］143頁

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

у кого NOUN. （某氏のもとに NOUN が存在する）

と表現する。存在そのものに話題の焦点があれば，動詞連辞 есть を用いて

у кого *есть* NOUN.

となる訳である。そこで上記のようなロシア語の表現となるのだが，一方ブルガリア語では一般動詞 имам は所有と存在双方を表し得る。この場合もロシア語では主語に存在する対象が立ち，実際に所有する人は，仮主語的な扱いとなる。ブルガリア語の動詞の場合は所有関係が人間を中心に記述される。

「どうなるのか，さっぱりわかりません」
Не *пойму,* что с ней.
Не *разбирам* какво става с нея.

「おとうさんにちょっとお話があるものですから。ご在宅でしょうか」
— Иду потолковать с вашим батюшкой. Он дома?
— да поприказваме с татко ви. Вкъщи ли *е*?

この例文では「どうなるのか」というロシア語の表現

что с ней 「なにが彼女のところで」

には連辞の記述がなく，что「何」と連辞の関係が極めて希薄であるのに対し，補語たる с ней が浮き彫りとなる構造を持っている。蓋しロシア語の文章は平叙文では文末には話者のメッセージの強調される部分である。茲にも述語と補語の関係の結びつきの強度が看取できるのである。ブルガリア語の場合は

какво става с нея 「どの様なことが彼女の身のまわりで生じたのか」

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

と主語と述語の関係は乱れることがない。上記第二の文中でも「ご在宅でしょうか」にあたる

ロ．Он дома？　　ブ．Вкъщи ли *е*？

についてほぼ同様なことが見て取れよう。

十七年まえ，二十二の年に，
Лет 17 назад, когда ей *было* 22 года,
Преди седемнайсет години, когато *беше* двайсет и две годишна,

次に年齢の表現を調べてみよう。ロシア語の場合，この構文は主格の主語の無い文が選ばれる。

ей *было* 22 года　　「彼女に・であった（連辞，過去）・二十二の年に」
「彼女が二十二歳の年に」。

ей は人称代名詞 она（彼女）の与格であり，文全体の雰囲気を支配している。連辞形 было は過去時制の中性単数の形をとっている。仮主語たる「彼女」との呼応関係は持たない。年齢表現も，その伝達目標の重心は認識主体には無いことからも，これまでの考察の範囲内にあると首肯せられるのである。ブルガリア語の動詞はこの場合も，беше と連辞 съм の過去三人称形で，主語に表現されていない彼女があることは，形態論上明白である。

背は低いし，痩せっぽちで赤ら顔だし，
Он *был* невысок ростом, худ, с румянцем на щеках,
Беше нисък на ръст, слаб, с червенина по бузите.

「なんぞいいことでもありますかな」

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

— Что *скажете* хорошенького?
— Какво ново-вехто?

上掲の例文中の「背は低いし」という表現に注目していただきたい。

Он был невысок ростом 「彼は・であった（連辞動詞過去）・高くない・背が」
「彼は背が低かった」

と表現されているが，「背」を意味する単語 рост が造格をとって，背丈の状態を表現している。また「高くない」という形容詞はこの場合短語尾形 невысок となっているが， невысокий と長語尾形でも表現できるのである。短語尾形は，特徴を，主体や客体の状況に合わせて，際だたせる役割を負うものであり，これに対して長語尾形は広く一般的，本質的な特徴を際だたせるために使われるとされる。本例文では，「背丈がことに低い」ことを記述の目標として，短語尾形が使われたのだとすれば，文全体の強調点が，形容詞の補語である ростом に置かれていることを看取しない訳にはゆかないのである。これに対し，ブルガリア語では

Беше нисък на ръст 「(彼は)・であった・低い・において・背丈」
「(彼は) 背丈が低かった。」

とこれまでの観察と異ならない。

第二の例文でも興味ある形容詞表現に接する。「なんぞいいこと」はロシア語では Что хорошенького? と「良いこと」が形容詞単数生格で表現されている。生格は名詞であれば，対象間の関係を示すのが普通であるが，(英語 B of A) このような場合は性質を表現する生格と広く呼ばれている機能を表現している。

Что *скажете* хорошенького?「何か・仰って下さい・良いことの」
「何か良いことがあれば教えて下さい」

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ロシア語のこの表現から我々は，同様に主語と述語の関係よりも，述語と補語との結びつきの方により大きい表現上の価値を見い出すのは容易であろう。

ブルガリア語の場合は

Какво ново-вехто？　「どんな良いことが・(あるのか)」

と述語のみの表現となっているが，有主文であることに変わりはない。形容詞の長語尾の例をさらにあげておく。表現の一般性が感じられよう。

パナウーロフは男ぶりはいいが，いささか厚かましく，灯明の火でタバコをつけたり，

Панауров, красивый, немножко наглый, закуривающий из ламладки.

Панаусров, мрасив, малко нагъл, който палеше цигарата си от кандилото.

子ども時代は，長くて退屈なものだった。

Детство *было* длинное, скучное；

Детството *беше* дълго и скучно；

形容詞の短語尾の例をあげる。

ラープチェフは自分が美男子でないことを承知していたので，

Лаптев знал, что он некрасив, и теперь ему казалось,

Лаптев знаеше, че *е* грозен, и сега му се струваше,

女性とのつきあいではぎこちなく，口が軽く，気どり屋だった。

в обществе женщин *был* неловок, излишне разговорчив, манерен.

в женско общество *беше* неловък, излишно приказлив и маниерен.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

女中は汚らしく，がさつで，かげひなたの多い女だった。

прислуга *была* грязная, грубая, лицемерная ;

прислугата *беше* мръсна, груба и лицемерна ;

ニーナ・フョードロヴナは，見かけはまだ元気そうで，

Нина Федоровна *была* еще крепка на вид.

На вид Нина Фьодоровна *беше* още здрава.

山口はチェコ語の例をあげて，連辞の人称変化の維持や，形容詞の短語尾形を長語尾形に置き換える傾向から，ロシア語よりもより主語と述語の関係強化の維持にあるとの認識を示している。チェコ語では短語尾形が用いられるのは，比較的数の少ない性質形容詞に限られていて，長語尾形に較べ，短語尾形は一時的なニュアンスが強い

Jsem št'asten.　「私は（いま）幸福だ。(短)」

Jsem št'astný.　「私は（一般的に）幸福だ。(長)」

Jsi vesel.　「君は（いま）陽気だ。(短)」

Jsi veselý.　「君は陽気な人だ。(長)」

形容詞が補語をとるときには，主として短語尾形であり，補語をとらないときには，長語尾形を使うのが一般的であるとしている。

Jeho konec *je* blízký.　「彼の終わりは近い。」

人に関わるときは短語尾形を，また動物やものに関係するときには長語尾形を用いる傾向も見られる。

Otec *je* stár.　「父は老いている。(短)」

以上のようなことから，チェコ語ではある時期まではロシア語と同じように，述語と補語の関係が強められていたが，再び主語と述語の緊密化が進んだと考察している。[16)]

スラブ語の時制とアスペクトの関係を次のように纏めることが可能となるように思われる。

---

16)　山口巌［1995］143頁

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

先ず，文を構成する幾らかの要素（主語，述語，補語）間の緊密度の関係が，時代によって微妙に変化している事実を，考察の前提として認識しておく必要がある。印欧祖語の時代には，述語と補語の関係が緊密であり，その結論として，述語動詞は細かい活用のパラダイムを必要とはしなかったが，やがて，時制の確立が進むにつれ，意味の表示機能，つまり，アスペクト的な見方が衰え始める。ある言語表現を，動作，状態の成就の過程の側から見る視点が，失われ勝ちになってくるからである。さて，東スラブ語のロシア語はこの状態からさらに，一つ前の状態へと先祖帰りをしているのかも知れない。つまり再び，述語と補語との関係の緊密化が再開されていることが，幾らかの現象から，窺えるように思われる。

これに対して，西スラブ語のチェコ語や南スラブ語のブルガリア語などは，主語と述語間の関係緊密化を維持して止まないと諒解出来る。時制は，文表現形成上の形式を規定しているにすぎない。アスペクトは完了，未完了，継続，反復，強調，願望，希求等の意味内容を表現する意味の範疇を形成するが，例えば，グルジア語では，現在時称では文は主語と述語の関係を強化し，アオリスト時称では述語と補語の関係から，状態表現の過程を記述するというように主語の側からの視点と補語の側からの視点を共存させつつ文を形成するような言語も存在する。

文を認識主体の側から記述するか，客体の側からするかという特徴は，ロシア語のような対格言語であるか，グルジア語等のような能格言語であるかという言語の類型の差とも関係してくる。一般的にアスペクト的な考え方が時制より古くから存在したことは爾来，提唱されて来たところであるが，泉井は，『表現せられんとする或る過程を先ず我々の有する時の観念的な段階に分類して，この分類に従って表現の形式を定めるのが時称の用法である。目前の或る過程の完成か不完成かを直ちに問ふのがアスペクトである。時称は間接的である，アスペクトは直接的である。時称は概念的であり理知的である，アスペクトは具体的である。アスペクトは量であり，時称は数である」と述べている。』[17)]

17)　井原久之助［1956］

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

この問題を考慮するのに，良い文のタイプがロシア語には存在する。それは，無人称文である。英語では例えば，It is fine today, is it 等がこれにあたる。自然現象を表現するときに，この言語では，仮主語を立てるが，ロシア語では以下のように，仮主語を立てずに，このような現象を不随意な事象として記述する。

この時刻にしてはもう暗かったが，
Было еще темно,
Беше още тъмно,
「であった（動詞連辞過去時制中性単数）・もう・暗い」
「もう暗かった」

さて，この場合，動詞は連辞の過去を表していて，中性単数の形をとってはいるものの，「誰がそのように認識したのか」という対象は文表現から隠れている。いわば主語の存在しない文である。勿論事実上の認識主体は文脈から忖度することが十分可能である。文構造から，発話の主旨が文末にあることは誰の目にも明らかであろう。同趣旨の文型をあげておく。

「クラブへ行くにはまだ早すぎますから」
— В клуб ему еще рано.
— За клуба му *е* още рано.

このタイプの文はロシア語には広く見られる。感覚表現，病気，「道がふさがった。」等の，行為者が主体的に関与しない一連の表現がそれである。例をあげる。

これらの菩提樹や，陰や雲などから，これらすべての自足している冷淡な自然の美から，なんと卑俗な風が吹いてくることだろう。
то какою пошлостью *веет* на него от этих лип, теней, облаков, от всех этих красот природы, самодовльных и равнодушных?

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

колко блудкави му *се виждат* тия липи, сенки и облаци, всички тези природни красоти, самодоволни и равнодушни!

たった今，医学だの宿泊所だのの話をしてきたことが恥ずかしかった。

Ему *было стыдно,* что он только что говорил о медицине и о ночлежном доме,

Срамуваше се, че току-що беше говорил за медицина и за нощен приют,

このような不随意な現象は当然のことながら，その状況を主体的に支配するべき存在の必要性を認めるものではないことは自明であろう。これとは反対にチェコ語やブルガリア語が主述の関係強化を維持している理由は，それらが置かれた時代的，地理的環境によるところが大きいものと思われる。例えば，ブルガリア語の場合，トルコ語，ギリシア語，ルーマニア語，それにアルバニア語などと，バルカン半島をめぐって共存関係にあるため共通な特色を所有するに至った事情も主述の関係強化の維持と何らかの関係があるのかも知れない。

参　考　文　献

B. Comrie Aspect Cambridge: Cambridge University Press 1976

Despina Ilieva, Български език, Slovenské Pedagogické Nakladatel'stvo, Bratislava 1982

Krízková　Первичные и вторичные функции и т. наз. транспозиция форм // Travaux linguistique de Prague Akademia Prague Prague 1966 No. 2

L. Grenoble The imperfective future tense in Russian // Word Vol. 46 num. 2

А. А. Шахматов Синтаксис русского языка Изд.《Учипедгиз》Л. 1941.

А. В. Бондарко Значения видов русского глагола // Русский язык в национальной школе 1970 №1.

А. В. Исаченко Грамматический строй русского языка в сопоставлении с словацким ч. 2 Изд.《Словацкой академии наук》Братислава 1960.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

А. Н. Гвоздев Современный русский литературный язык ч. 1 Изд.《Просвещение》 М. 1967.

А. П. Чехов Избрани творби в осем тома т. 4 Изд.《Народна култура》 София 1988.

А. П. Чехов Полное собрание сочинений и писем в тридцати томах т. 10 Изд.《Наука》 1977.

А. Спагис Почему так трудно научить нерусских учащихся видам глагола // Русский язык в национальной школе 1970 № 5.

АН СССР Грамматика современного русского литературного языка, Изд-во《Наука》, М. 1970.

АН СССР Русская грамматика Изд.《Наука》 М. 1980.

Б. Байчев и др. Български Език за чеждестранни български и слависти, Изд. Наука и изкуство, София, 1985.

В. В. Виноградов Русский язык М. -Л. 1947.

В. В. Гуревич О значениях глаголов вида в русском языке // Русский язык в школе 1971 № 5.

Е. И. Демина Простые прошедшие времена в болгарском языке в свете《видовой》 теории // Philologia slavica Изд.《Наука》 М. 1993.

Е. Н. Прокопович Стилистика частей речи глагольные словоформы Изд.《Просвещение》 М. 1969.

Ел. Георгиева и др. Правописен речник на съвременния български книжовен език Изд.《БАН》 София 1983.

И. К. Бунина История глаголных времен Изд.《Наука》 М. 1970.

К. Мирчев и др. Историческа граматика на бърграрския език Изд.《Наука и изкуство》 София 1978.

Л. Андрейчин и др. Български тълковен речник Второ изд. Изд.《Наука и изкуство》 София 1963.

О. П. Рассудова Употребление видов глагола в русском языке Изд.《МГУ》 1968.

С. Л. Корчикова Русский язык Изд.《Просвещение》 М. 1970.

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

С. Стоянов Граматика на съвременния български книжовен език т. 2 Изд.《БАН》 София 1983.
朝倉季雄『フランス文法辞典』三省堂，1970
井泉久之助「言語構造論」『言語の研究』有信堂，1956
金田一真澄『ロシア語時制論』三省堂　東京　1994.3
柴谷方良『日本語の分析』大修館書店，1978
橋本文夫『詳解ドイツ大文法』三修社，1970
細江逸記『動詞時制の研究』泰文堂，1955
———『動詞叙法の研究』篠崎書林，1974
山口巌『ロシア中世文法史』名古屋大学出版会，1991
———『類型学序説－ロシア・ソヴェト言語研究の貢献』京都大学学術出版会，1995
山田勇「СВЯЗКА について」『香川大学教育学部研究報告』第一部第三十二号 1972
———「ロシア語に於ける意味論上の主辞について」『香川大学教育学部研究報告』第一部第五十七号　1983
———「ВИД と ВРЕМЯ の関係について」『香川大学教育学部研究報告』第一部第三十四号　1973
———「ВИД と ИНФИНИТИВ の関係について」『香川大学教育学部研究報告』第一部第三十六号　1974
———「ВИДОВАЯ ОППОЗИЦИЯ について」『香川大学教育学部研究報告』第一部第三十三号　1972
ア．ペ．チェーホフ「三年」『チェーホフ全集』第七巻（松下裕訳）筑摩書房 1988.10
ヘルマン・パウル『言語史原理』福本喜之助訳　講談社，1970